

モンゴル人伝統仏教学者によるカンギユルの研究

ダワードルジ プルブドルジ (佛教大学大学院)

18 世紀以降に活躍したモンゴル出身の学僧達の中にはカンギユルに収載される諸經典の真偽 に関する文献類の著作がある。

本発表では、スムパケンポ (Sum pa mkhan po 1704-1788) により、1782 年に著された *gSung rab rnam dag chu'i dri ma gsal byed nor bu ke ta ka* を先ず概観する⁽¹⁾。彼はその中で、カンギユル所収の一部の翻訳經典の訳語、訳文の誤りや不正な点などを取り上げ、更にカンギユルの中にはあきらかに非仏説と思われる文献が少なからず存在することを指摘し、一部のチベット人訳経僧や編集者を批判している。またモンゴル僧達が日常に唱える真言類をとりあげ「無意味な言葉であり真正なマントラではない」という主旨の批判をしている⁽²⁾。トゥカン・チューキドルジ (Thu'u bkwan chos kyi rdo rje) が著したカンギユル所収文献に関する書 *rGyal spyi'i bod kyi ris med chos brgyud mthun tshog*⁽³⁾ にはこのスムパケンポ作の当該論説が頻繁に引用されている。

シャドゥブ・ダンドル (bShad sgrub bstan dar: 1835-1915) というモンゴル僧によって著作された *dKa' 'gyur zhus dag*⁽⁴⁾ を次に検討したい。この作品の制作年代は不詳であるが、作品の内容は、ナルタン版・北京版・チヨネ版カンギユルをデルゲ版やギャンツェ・テンパンマ写本と対照させ、版本カンギユル所収の典籍群から問題のある箇所を取り上げるほか、訳文や訳語の誤りを正すとといった作業を行っている。この作品に関する詳細な研究報告は見られないが重要な資料であると考えられる。

bKa' 'gyur gyi brgyud rim (カンギユルの相承) といわれる文献⁽⁵⁾ がモンゴルで最近発見された。文献には著者名や制作年代に関する記録は見当たらないが、カンギユルの各目録に関する記事とナルタン版・ツェルバ版・テンパンマ写本カンギユルについて記され、チベットからモンゴルに「カンギユルの相承」が如何にして伝わったかということについて詳細に記述されている。

以上のように、「シュタク」及び「カンギユルの相承」⁽⁶⁾ と称される文献類はカンギユルの研究、特にモンゴル仏教僧がチベット語経論典を受容していく事情を考える場合、貴重な資料価値を持つものであると言える。

(1) Sum pa mkhan po Ye shes dPal 'byor, *gSung rab rnam dag chu'i dri ma gsal byed nor bu ke ta ka zhes bya ba*, Collected Works of Sum-pa-Mkhan-po, Reproduced by Lokesh Cabdra from the original xylographs of Raghu Vira, International Academy of Indain Culture, New Delhi, 1979, Śata-pitaka Series, Indo-Asian Literatures, vol.217, pp.881-906.

(2) *kha mchu nag po zhi byed theg chen mdo zhes par om kha dum om kha mchu sod ces sogs grong ba'i gdam nyag nyog...* (同書 p.896.)

(3) Thu'u bkwan chos kyi rdo rje, *rGyal spyi'i bod kyi ris med chos brgyud mthun tshogs*, The International Association of Non-sectarian Tibetan Religious Tradition, [online] www.iantrt.org (参照 2016-6-4)

(4) bShad sgrub bsTan dar, *dKa' 'gyur zhus dag* (Collected Works by 19th century Khalkha author Shedrub Tendar Ngarampa, Sharada Rani, New Delhi. 1982.

(5) *bka' 'gyur rin po che yongs rdzogs kyi bglag lung gsan pa'i thob yig blo ldan dga' bskyed ces bya ba las rgyu phar phyin theg pa gtso bar ston pa'i 'dul ba dang sher phyogs kyi skor dkon rtsegs phal chen mdo phyogs skor gyi dkar chag brgyud rim dang bcas pa* // モンゴル国立図書館の研究員 Nyamsuren 氏の個人文庫所蔵(手書きテキスト)。

(6) ガンダンテクチェリン寺学術文化研究所の研究員 N.アムガラン「あるモンゴル人僧の未報告の著作の 概要」<大谷大学真宗研究所チベット班研究会 (2017 年 6 月 7 日) 配布資料>によれば、bLo bzang me 'gyur rdo rje(1865-1937)の全集の中にも bKa' 'gyur gyi brgyud rim という同タイトルの文献が含まれるという。

18～19世紀にモンゴルに招聘されたチベット僧の著作について

松川 節（大谷大学） & N. アムガラ（モンゴル国ガンダンテグチンリン寺学術文化研究所）

モンゴルの地に伝播した仏教は、チベットの高僧たちと密接な関係をもつ。13 世紀前半にチベットから招聘されたモンゴル宮廷の帝師たちの著作を始めとし、16 世紀初頭における仏教の後伝期に関わるチベットの高僧たちの著作は極めて興味深いものである。18～19 世紀にモンゴルに招聘されたチベット僧の著作には、報告されていないものかなり多く存在する。本報告で、その一端を紹介する。1904～06 年のあいだにモンゴルに滞在した 13 世ダライラマ・トゥブデンジャムツ Thub bstan rgya mtsho, クンブム sKu 'bum 寺のセルトク・ノモン・ハン・ロブサンツルティムジャムツ gSer tog No mon han bLo bzang tshul khriims rgya mtsho, クンブム sKu 'bum 寺のアンジャース・シャブルン Ang rgya su zhabs drung, 8 世ジェブツンダムバ・ホトクトの師ヨンズイン・ハムバ・ロブサンハイムチョグ Yongs 'dzin mkhan po bLo bzang mkhas mchog, ヨンズイン・ハムバ・アーリ・ブルルグ・ハイドゥブダンザンチョイジニヤム Yongs 'dzin mkhan po mNga' ri sprul sku mkhas grub bstan 'dzin chos gyi nyi ma, ヨンズイン・ハムバ・ガチン・バルダン・チョインベル Yongs 'dzin mkhan po dKa' chen dpal ldan chos 'phel などの高僧がモンゴルの地に滞在中に著した著作を紹介し、その資料価値を評価したい。

西夏がモンゴルのチベット仏教信仰に与えた影響
——コデン統治下における白傘蓋経の刊行事業を通して——

浜中沙椰（早稲田大学大学院）

チベット仏教とモンゴル王侯との師檀関係樹立の契機は、サキャ派のサキャパンディタ (Sa skya paNDita kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251) と、西夏 (1038-1227) の崩壊後、涼州に駐屯したコデン (Köden) との面会 (1247 年) であると見なされてきた。

しかし近年、中国の史金波氏によりコデンの名が刻まれた西夏文白傘蓋経及び発願文 2 点が新出史料として公開された。この 2 点の発願文からは、コデンとサキャパンディタの面会の約 4 年前に、既にコデンの名のもとで白傘蓋経の仏典刊行事業が行われたこと、コデンはチベット僧とみられる人物と師檀関係を築いていたことが読み取れる。

西夏では、12 世紀中頃以降、phyag rgya chen po や rdo rje phag mo、lam 'bras 等のチベット仏教文献の西夏語への翻訳が盛んに行われ、チベット仏教が受容されていた。コデンはサキャパンディタとの面会以前に、既に旧西夏領のチベット仏教と接触したと考えられる。

従って、西夏におけるチベット仏教、及びコデンが接触したチベット仏教について把握することで、西夏の仏教がモンゴルのチベット仏教信仰に与えた影響を解明することができる。

これらを踏まえ本発表では、①西夏文白傘蓋経とチベット文白傘蓋経とを比較し、その由来を考察すると共に、②西夏文仏教文献から見た西夏に流伝したチベット仏教の傾向を明らかにする。そして、西夏内で活動していた人物がもつ相承関係を明らかにすべく、③西夏と同時代に活動し、西夏文仏教文献にもその名が刻まれているカギユ派のガムポバ (sGam po pa bsod nams rin chen, 1079-1153) や、サキャ派のクンガーニンポ (Sa chen kun dga' snying po, 1092-1158) らのチベット僧の相承系譜と併せて考察する。

チベットにおける地域紛争の解決について ——中国青海省黄南チベット族自治州の事例から——

デンチョクジャブ (滋賀県立大学大学院)

チベット人遊牧地帯では長い間、放牧地や家畜をめぐる紛争が続いてきた。中華人民共和国の成立後も、このような紛争は継続している。青海省のチベット人居住地域でも、近年放牧地や冬虫夏草などをめぐる地域紛争が頻発しており、毎年死傷者を出している。本発表では、青海省黄南チベット族自治州のロンウ集落と同省海南チベット族自治州のゴンコンマ集落の間に起きた放牧地の境界をめぐる紛争を取り上げる。

両集落は歴史的、地理的な原因によって長い間友好と敵対の関係を繰り返してきた。1995 年両集落の関係は、放牧地の境界をめぐる問題で極めて緊張した状態になり、境界とされる尾根の両側に双方の約 2800 人が塹壕を掘り、鉄砲を持ちながら、時に戦い、時には休戦していた。紛争は 1996 年 8 月まで続き、最終的に双方で 17 人が殺害される暴力事件になった。

青海省政府の依頼で、チベット仏教の高僧 5 名が調停者として指名され、彼らの話し合いによって、翌 1997 年の 7 月に調停書が公開され、紛争は一応解決した。

本発表では現地調査に基づいて、ロンウ集落とゴンコンマ集落との間に起きた紛争の歴史、原因、経過、調停の方策などについて報告することによって、チベット人の地域社会と中国の地方政府との関係を考察する。

ツォンカパの『菩提道次第大論』とドルンパの『教説次第大論』の関連性

更藏切主 (大谷大学大学院)

『菩提道次第大論』のコロフォンに、この著作の作成に用いられた「ラムリム(道次第)」と「テンリム(教説次第)」関係のテキストが挙げられている。そのうち「テンリム」関係のテキストとしては、大翻訳師(rngog blo ldan shes rab, 1059-1109)とドルンパ・ロドウージェンネー(gro lung pa blo gros 'byung gnas, 11 世紀後半から 12 世紀前半)の『教説次第大論 (テンリム・チェンモ)』が言及される。

また、ケドゥブジェによるツォンカパの伝記『信仰入門』にも、ツォンカパは、ロロトウータク(lo ro stod ltag)の滞在中、ドルンパの『教説次第大論』が将来されたことを歓迎し、そこで講説も行ったと記されている。その後、『菩提道次第大論』を著すときにも、自分の考えていた道の諸段階と一致することが多いという点でゴク・ロデンシェラプの「教説次第」と弟子のドルンパの『教説次第大論』を高く評価している。したがって、これらの著作を読んだことが『菩提道次第大論』を執筆する契機の一つになったと考えられる。しかし、『菩提道次第大論』の中には直接に『教説次第大論』やドルンパの名前に言及しているところは見当たらない。

本発表では、『教説次第大論』の特徴を紹介した上で、両著作の引用文献と構成を比較することによって、特に『教説次第大論』が『菩提道次第大論』に影響を与えたと思われる点をいくつか指摘したい。共通する引用文献に関しても、科段の構成に関しても、善知識への師事作法から大乘の発菩提心までに共通点を確認できる。ただし、『教説次第大論』では、修行の段階を「三士」に分けることはないのに対し、『道次第大論』では、同じ項目が準備・小士・中士・大士の段階に分けられている。一方、大乘の発菩提心以降の部分は共通の項目はあるものの、引用文献も構成も大きく異なる。『教説次第大論』は大乘の様々な修行項目について列挙しているのに対し、『道次第大論』は菩薩行として六波羅蜜を述べた後、止観を詳論し、さらにその先に密教の修行階梯があることを説いている。以上から、ツォンカパは道次第の初めから発菩提心までについて伝統的教学を踏襲し、それ以降の部分で独自の展開を示していると言える。

ナーローパの法について

渡邊温子（大谷大学）

インドの行者ナーローパ（1016-1100）は、ナーランダー寺院の管長という最高の地位を捨て、法を求めてティローパ（988-1069）に師事した人物である。彼はティローパのもとで、12の苦行を中心とした多くの試練を課せられた。世俗的視点から見れば不条理としか言いようのない苦行を通じて、ナーローパは悟りへの道を歩んだ。ナーローパが授かった教えは、チベットのマルパ翻訳師（Mar pa chos kyi blo gros, 1002-1097）が継承し、弟子のミラレーパ（Mi la ras pa zhad pa's rdo rje, 1040-1123）へと伝え、そこからガムボパ（sGam po pa bsod nams rin chen, 1079-1153）へと伝わった。ガムボパはカダムの教えとマハームドラーの教えを融合させ、カギュー派を作った。その教えは、今日まで継承されている。これらの継承される教えのうち、「ナーローの六法」は、カギュー派のみならず、ゲルク派においても重要な教えである。ゲルク派の開祖であるツォンカパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357-1419）や、パンチェンラマ 1 世（Blo bzang chos kyi rgyal tshan, 1568-1662）などによって、数々の注釈書が書かれている。この教えが非常に有名である一方で、「六法」という数の規定は、ナーローパの伝記や著作の中に見られない。本発表では、ナーローパの教えが一体いかなるものであったのか、また何時頃から六つの法と規定されるようになったのかについて述べたい。

Kāraṇḍavūha-sūtra のネパール増広部分に含まれる *Bodhicaryāvatāra* の引用について——チベット語訳における現行テキストとの異同の検証を中心に——

佐々木一憲（立正大学）

観音菩薩の六字真言（Ṣaḍakṣarī）を伝える経典 *Kāraṇḍavyūha-sūtra*（『仏説大乘莊嚴寶王經』大正 No.1050：以下 KvS）は、ネパールにおいて 15 世紀に組織的な増広を受けて今日まで伝えられている。ところで、その増広部分にはかなりまとまった分量の *Bodhicaryāvatāra*（以下 BCA）からの引用が見られる。Tuladhar-Douglas[2006]はこの増広部分を現行の梵本 BCA とは少しく系統の異なるものとするが、同氏の研究では同箇所についてのサンスクリット語写本間での異同は示されるものの、チベット語や漢訳、並びに BCA の古版と目される敦煌出土の *Bodhisattvacaryāvatāra*（以下 BSA）との比較対照はなされていない。そこで本研究はその不足を補う意味で、いずれもチベット語で残っている、諸版所収の正典版 BCA ならびに敦煌本 BSA と、同経中の増広箇所にかかっている文言とをそれぞれを比較し、その異同を確かめることとした。いま、Tuladhar-Douglas[2006]が例証として特に取り上げている現行 BCA II-31 相当箇所を見ると、チベット語訳諸版は、古版の BSA のものも含めて、すべて KvS と対応する訳語を持っており、その一方で、当の語は現行のサンスクリット語 BCA のものとは対応していないことがわかる。このことから少なくとも、正典版 BCA の校閲者は、この箇所に関して、KvS 増広者が見ていたものと同じ版の BCA/BSA の読みを採用したとすることができるだろう。問題の箇所を含む現行 BCA の II 章は、一連の発菩提心儀礼の一部（「懺悔」部分に相当）を構成する部分であり、日常的な儀礼の中で現実に読誦されてきたものと考えられることから、この箇所は、テキストの読みが現実に挙行される儀礼によって規定された例とみることができるかもしれない。

初期チベット中観思想における空性理解

西沢 史仁 (大谷大学真宗総合研究所)

空性とは何であるのかということは、中観思想において最も重要な主題であり、チベットにおいても相反する多様な解釈が生じた。後代のゲルク派では、空性は認識対象として存在しており、無否定 (med dgag, *prasajyapratishedha) であると規定された。しかるに、既にツォンカパは、『了義未了義弁別・善説真髓』において、空性理解をめぐって、チベットの「古い学者達」の間に解釈の相異があり、空性を (1) 真実成立と見なす立場、(2) 知の対象として存在しないと見なす立場、(3) 知に応じて有無の区別を立てる立場の三つに整理している。註釈書によれば、それらは、順にチャパ (Phya pa chos kyi seng ge, 1109-1169)、ゴク翻訳師 (rNgog lo tsā ba blo ldan shes rab, 1059-1109)、トルンパ (Gro lung pa blo gros 'byung gnas) の見解に同定されるが、この三者は何れも 11-12 世紀頃にサンブ寺で活躍した学僧である。

そこで本発表においては、このツォンカパの記述を手掛かりとして、この中でも特に、チャパとゴク翻訳師の空性に関する見解に焦点を当て、近年利用可能となった彼らの原典資料に基づき検討したい。これをもって、これまで殆ど知られてこなかった初期チベット人学者達の一連の空性理解に関する予備的研究とする。資料としては、ゴク翻訳師の『甘露一滴』や、チャパの『中観東方三論提要』、『善逝と外教徒の学説の分別』、中観東方三論に対する一連の註釈等を使用する予定である。